

7. 過去の生産額

昭和15年以前は水害の爲記録が喪失してゐる。

i) 粗鑛出鑛量

	出 鑛 量 (t)	品位 Pb(%)	品位 Zn(%)
昭和 21 年	12,903	2.07	4.37
" 22 年	13,520	2.11	4.55
" 23 年	10,111	2.78	5.50

ii) 精鑛生産量

	鉛 生産量 (kg)	品位(%)	亜鉛 生産量 (kg)	品位(%)
昭和21年	314,850	74.51	1051,310	47.57
" 22年	322,190	76.52	1103,650	47.19
" 23年	315,475	76.79	993,378	49.67

8. 探 鑛

i) 本坑鑛床

今回の調査によつて次のことが確認された。

1. 鑛脈群は網の目のような形態を呈し、現在主脈と考へられてゐるもの、他にも同様に優勢な鑛脈の存在が予想される。

2. 鉛亜鉛晶出帯の深さは約 160m 位である。

以上の事實から具體的には次の方法が考へられる。

1. 少くも 1cm 以上脈幅を有する鑛脈は錘押探鑛を試みる必要がある。

2. 開發された各鑛脈の間を探鑛する必要がある、鉛亜鉛晶出帯内で簡単な水平試錐を試みることが有効な探鑛法と考へる。(以下省略)

9. 結 語

本鑛山は現在の確定鑛量は少ないが、本坑鑛床だけでも裂縫の生成機構より尙相當の鑛量の存在が予想され、現在行はれつゝある巻の澤及び中小屋坑の探鑛もこの附近の鉛亜鉛晶出帯の位置から相當期待出来るものがある。

(註 編輯の都合上原文の意を變へないと思はれる範圍で掘越が省略した部分がある。)

速 報 欄

553.61 : 550.8 (521.16)

福島縣石川郡淺川町附近耐火粘土

平 山

健*

Résumé

On the Preliminary Survey of the
Fire Clay near
Asakawa-machi, Fukushima Prefecture.
by T. Hirayama

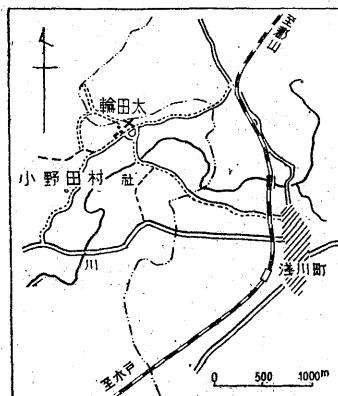
The beds of fire clay associate with lignite-beds in the Tertiary strata, forming the small hills near the town. The grade of the clay is SK 28-32, and the quantity is nearly 6,000 tons.

要約 淺川町西北方の丘陵を成している時代未詳の第三紀層中の亜炭層に附隨して、耐火度 SK 28—32 の耐火粘土が約 6,000t 存在している。量的にも亦、質的にも精査を要するが、交通運搬條件は良好であるから、小規模に採掘使用の目的には適するであろう。

I 位置・交通 本地域(福島縣石川郡淺川町、同縣東白川郡小野田村)は水郡線淺川驛西北方約3kmの所に位置し淺川驛から徒歩約30分で達する。附近の亜炭運搬の爲のトラックが往復し交通は便利である。粘土賦存地

* 地質部

附近は小野田村字太田輪の部落に近接している爲に道路への搬出は人家の間を運搬する事になる。(第1圖参照)



II 地形 附近は社川に依つて作られた沖積平野の殘丘と思われる丘陵で標高 350m を最高とし道路と最高點との比高は約 50m である。部分的には古い社川の河成段丘が殘っているが狭範圍であつて高度約 10m である。

III 地質 殘丘は第三紀層を以て形成されているが、時代は、これを決定するに足る化石の産出が無く詳細は不明である。

丘陵は上部では鹽基性乃至中性凝灰岩層から成つて居り、砂岩、礫岩、硅質砂岩、砂層等を介して夾亜炭

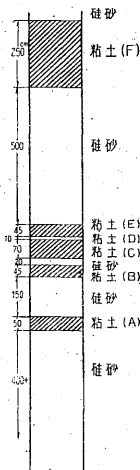
層に達し更に下方には粘土層、珪砂岩、珪砂等を経て基盤の花崗閃緑岩に至るものと思われるが、短時日の概査でその詳細は明らかでない。

Ⅳ 耐火粘土層 耐火粘土層は太田輪部落の背後丘陵の斜面に水平に珪砂層中に見られる。青灰色乃至淡青色又は紫褐色乃至淡褐色を呈し、時に鐵分(?)の流出に依つて黄褐色を呈する。時に木質小片を含有し、所謂木節質と見られる部分もある。(第2圖B, C, D, E部)

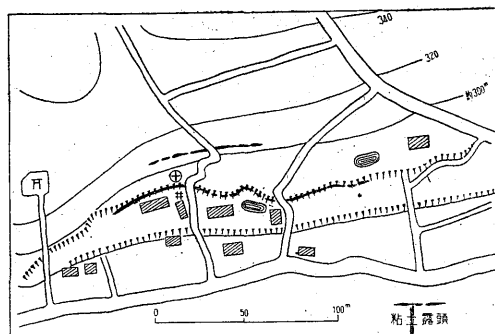
主なる露頭(防空壕として掘つた横穴別圖⊕印)における柱狀圖を右に示す。耐火度試験は大部分が未詳であるが、先きに日本鋼管株式會社に於て行つたものではCにおいてSK31-32, FにおいてSK28であつた。C, D, Eの粘土層は亜炭層に移化する事があり最厚70cmに及ぶ。附近各所において稼行されつゝあるものはこの亜炭層であると思われる。

粘土層は概してB, C, D, E部が良質でA, Fはやゝ劣り、Fは白雲母の細片を含有する部分が多い。

Ⅴ 鑛量 露出不充分でその全量を確定する事は出来ないが、やゝ確實性のある地域の粘土層を概算すれば、B, C, D, Eの全厚を平均して150cmとし、粘土の比重を2.3とすれば見込まれる層の延長は120mであるからで



第2圖



第3圖 耐火粘土露出地略圖

120m×15m×1.5m×2.3=6210t.

ある。(防空壕の奥行12mであるから粘土の奥行きを15mと推定する)

稼採率を4割とすれば、稼採鑛量は約2500tと推定される。

Ⅶ 結語 本地域の耐火粘土は、現在の處量的にも質的にも必ずしも勝れたものではないが、運搬採掘の比較的容易である點から見て、地方的に原料として使用する目的で小規模に稼行するには適當であらう。但し本概査の結果のみに依つて起業を計るのは未だ早計であつて、これには今後先ず耐火原料としての性質を試験することが最も必要であり、しかる後地形測量を實施し、又粘土層は地表から比較的淺所に存在するから丘陵の上から試錐を行う事に依り、存在鑛量を更に精査の上決定するのが必要である。

553. 574:550.8 (521.85)

山口縣大嶺珪石調査概報

岩 生 周 一*

Résumé

The White Silica Stone of the Oomine, Yamaguchi Prefecture.

by Shuichi Iwao.

The white silica stone has been used for several years as raw material of the silica brick of glass furnace.

This is the first report published of the ore reserve as well as the geologic occurrence of the deposit.

1 緒 言

所謂大嶺珪石は山口縣美禰郡南大嶺にあり、美禰線南大嶺驛の西側に隣接し、交通運搬頗る便である。目下品

* 鑛床部非金屬課長

川白煉瓦株式會社の直營で採掘され、鑛石は大連珪石の代替原料の一部として三河珪石と混用し、ガラス爐用珪石煉瓦の製造に當てられている。

筆者は昭和25年2月17日より約一週間、鑛量の算定を主目的として調査を行い、略々その目的を達し、更に附近一帯に於ける類似鑛床賦存状態に關しても大體明かになる事を得た。***

2 地 質

第2圖に示した如く、地域内には古生層及び中生層が

*** 調査は窯業原料協議會の事業の一部でもあり、同協議會から費用の一部補助を得た。又、品川白煉瓦大嶺珪石鑛業所、三菱化成工業伊保工場、同鶴見研究所、九州大學地質學教室からは調査の便宜及び資料の提供を受けた。茲に深謝する。